

No.70 ジャン・ピエール・レイノー —無題—

Jean-Pierre Raynaud

北川フラムさんのコラム / 1997 (平成9) 年 1月1日付 立川市市報記事より

ジャン・ピエール・レイノーは、ファーレ立川のだ真ん中、デパートのオープンカフェテラス用地に高さ5メートルもある巨大な真っ赤な植木鉢を持ち込んだ。植木鉢は白と黒の美しい床面に置かれている。彼は、この空間を「鉢物の庭」と呼んだ。たしかに新しい近代的な都市の中に設置されたこの空間は、現代の新しい庭のようであり、そこからは、自然から切り離れた、私たちのせつない憧れが伝わってくる。

ジャン・ピエール・レイノーはもともと植木屋に弟子入りしていて、植木や植物に造けいが深い。この植木鉢は、今やファーレ立川を代表する光景になっており、待ち合わせ場所としても重宝されている。

作家のメッセージ / 日本住宅公団 (現: UR 都市機構) 「ミニ通信」より

植木鉢にセメントを詰め、全体を真っ赤に塗るという芸術行為が生まれたのは、ちょうど32年前にさかのぼります。

この行為により、私は自然への関心を表し同時に、風景や植物に対して私たちがとられる感情を蘇らせたいという欲望を表現したのです。

私は庭師の教育を受けており、またこうした問題提起によって、自然について私たちが抱いている秩序が乱されてしまうかもしれないと常に考えてきました。

私たちが庭について覚える感情は、型にはまり、しばしば俗化してしまいましたが、バウハウスが建築についてしたように、20世紀という時代は自然の概念の近代的深化により、庭について答えなければならないように思われます。

アジアには陰と陽の概念があり庭の概念は日本文化の核にあるわけですが、このことは東京において私の代表作を実験するにあたり、とりわけ私を喜ばせるものであります。

庭や生け花を尊重することで、自然の知性一点張りの危機的展開が妨げられたのでしょうか。

私の行為はいかなる場合においても、神聖を汚すものではありません。

それは人間を万物の前に位置させる愛の儀式であり、人間に対する信頼があるからこそ、私たちの希望は、環境と共に営まれるこの儀式にあるのです。

生きた記憶としての植物と出会うという、この近代的な行為は、かつて税官吏であったルソーが表現したように、発明されたあらゆる風景を私たちに語っています。

彫刻となった植木たちは、原子力時代の私たちの魂の中にいまだに生きている自然を紀元2000年代の夜明けを迎える私たちの街に呼び起こすことでしょうか。

幼いころからの夢は、その最もすばらしい証です。